

シンガポールにおける日本人サッカー選手

後藤 貴浩

The Japanese Soccer Player in Singapore

Takahiro Goro

(Received by October 1, 2013)

1. はじめに

本研究では、近年、増えつつある東南アジアでプレーする日本人サッカー選手に着目する。Jリーグの発足後20年が経過し、日本におけるサッカー界のピラミッド構造(図1)は、サッカー競技者のパスウェイとして確立しつつある。幼少期にサッカーを始めた者たちは、キッズや4種から1種へと連なる年齢階梯別さらにはJ1を頂点とする競技力別の2つのピラミッド構造内を移動していくのである。そのような中、近年では、ヨーロッパではなく、東南アジアにサッカー選手として移動する者が増加している。例えば、タイにおける日本人サッカー選手の動向を確認したところ、表1に示すように2012年度現在で41名の選手がタイのサッカーリーグに在籍している/したことが確認された。つまり、これまで確立されてきたピラミッド内に、あらたなパスウェイが創出されつつあるといえる。

その背景として、まず、Jリーグにおける若手選手の解雇がある。高橋(2010)によると、毎年100名を超える選手がJリーグから登録抹消され、その7割が20歳代(平均引退年齢:25.6歳)であるという。そういった若手選手がプレーの場をもとめて東南アジアに移動していくことが想定される。また、サッカー競技者の“海外移籍”に対する願望もある。多少、古いデータではあるが、2002年のJリーグ選手協会調査によると、Jリーガーのうち71%が海外でのプレーを希望しており、21歳未満では85%にも上るという。近年のヨーロッパでの日本人選手の活躍は、これにさらに拍車をかけていると思われる。さらに、昨今の大学や専門学校におけるスポーツ競技者養成コースの増加が挙げられる。このことは表1における選手歴を見ても分かるように、高等教育機関が、Jリーグを頂点とするピラミッド構造における競技者養成機関となりつつあるといえる。これにより、サッカー競技者としてピラミッド構造内に留まる者が増加し、競技生活を延長することが可能になったとみられる。

本研究では、このように新たに形成されつつある東南アジアへの日本人サッカー選手の移動に着目し、どのような社会的状況の中で、日本人サッカー選手は東南アジアに渡り、プロサッカー選手として暮らしているのかということをも明らかにする。特に、ここではシンガポールを対象とすることとした。その理由として、第一に東南アジアの中でも日本と同じような社会経済状態にあるということがある。日本での生活水準と同程度にあると想定される国を対象とすることで、海外でプレーするという意味がより鮮明になると考えたからである。第二に、アルビレックス新潟シンガポール(以下、アルビSとする)の存在がある。このチームは、日本人選手の東南アジアへの移籍の窓口となりつつあり、直接、調査対象とすることで多くの情報が得られると考えられたからである。

2. 研究の方法

1) 本研究の視点

人びとはどのようにしてスポーツと関わり続けるのか。このような問いに関する議論は、主にスポーツへの社会化論において行われてきた。ケニヨンとマックファーソン(1973)が「スポーツ社会化論」を成立させて以来、我が国においても社会役割-社会システム論によるアプローチおよびその後の相互作用論的なアプローチによって取り組まれてきた(海老原ほか, 1989)。その結果、スポーツ参加や離脱に関わる要因間の説明やスポーツ経験の社会生活における有用性の検証という点で多くの成果が得られてきた。一方で、これまでのスポーツ社会化研究では、スポーツの機能を前提とした参加機会の拡大が目指されてきたため、人びとはどのようにしてスポーツと関わり続けているかという継続の様相を記述した研究は少ない。そこで本研究では、そのようなスポーツ振興論の立場から一旦距離を取り、人びとがスポーツと関わり続ける

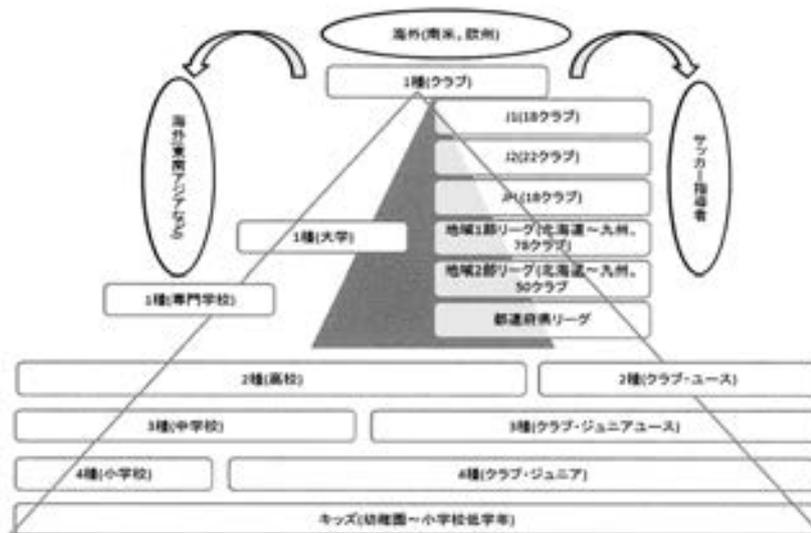


図1 日本サッカー界のピラミッド構造 (筆者)

表1 タイのプロサッカーリーグに在籍する/した日本人プレイヤー一覧 (2012年度)

No.	選手歴	No.	選手歴
1	桂高等学校、京都産業大学、佐川印刷 SC、チョンブリー FC (タイ)	23	FC 東京 U-18、東京農業大学、佐川急便東京 SC、アントン FC (タイ)
2	新潟工業高等学校、東京農業大学、アローズ北陸、アルビレックス新潟シンガポール、ヴァリエンテ富山、Sengkang Punggol FC (タイ)、TTM FC ピチット (タイ)、パタヤユナイテッド FC (タイ)、オーソットサパー M-150 サラブリー (タイ)	24	NICHIKA,Londrina (ブラジル)、EC Londrina (ブラジル)、RC Neauphle (フランス)、FC PB Montpellier (フランス)、USG(フランス)、Val di Sangro(イタリア)、BV04(ドイツ)、Breaza (ルーマニア)、Berca (ルーマニア)、Stoicescu (ルーマニア)、バクナムポー NSRU FC (タイ)
3	山陽高等学校、拓殖大学愛媛 FC、YKK AP、パレスティア・カルサ FC (シンガポール)、シーラチャー FC (タイ)、バンコクグラス FC (タイ)	25	桐蔭学園高等学校、揚茜クラブ、白沢クラブ、揚茜クラブ、バジェロボ矢崎、宇都宮 FC、パンガー FC (タイ)、カセムバンディット・ユニバーシティ FC (タイ)
4	富岡高等学校、ジュビロ磐田、ブリーラム・ユナイテッド (タイ)、バンコク・グラス FC (タイ)	26	パッターン FC (タイ)、チャントブリー FC (タイ)
5	武南高校、名古屋グランパスエイト、ヴィッセル神戸、ジェフユナイテッド市原、横浜 FC、東京ヴェルディ、バンコクグラス FC (タイ)、ランシット FC (タイ)	27	PKNS FC (マレーシア)、Garforth Town AFC (イギリス)、C.A. Boston River (ウルグアイ)、プラチンブリー FC (タイ)、シーラチャー SUZUKI FC (タイ)、コンケン FC (タイ)
6	ジュビロ磐田ユース、ジュビロ磐田、CA リーベル・プレート (アルゼンチン)、ジュビロ磐田、セレッソ大阪、川崎フロンターレ、ジュビロ磐田、東京ヴェルディ、ポリスユナイテッド FC (タイ)、TOT SC (タイ)	28	刀根山高等学校、CA Huracán U-18 (アルゼンチン)、CA Huracán U-20 (アルゼンチン)、CA Huracán (アルゼンチン)、Defensores de Belgrano (アルゼンチン)、MIO びわこ草津、Dempo SC (インド)、BEC テロサーサナ FC (タイ)
7	帝京高等学校、大分トリニータ、サガン鳥栖、大分トリニータ、柏レイソル、アビスパ福岡、パリエンテ郡山、AC 長野パルセイロ、SCG サムットソンクラーム FC (タイ)、PTT ラヨーン FC (タイ)	29	登別大谷高等学校、仙台大学、ブランメル仙台、札幌蹴球団、ウッドランド・ウェリントン FC (シンガポール)、ウエストゲート SC (オーストラリア)、サイゴン・ポート (ベトナム)、傑志 (香港)、オーソットサパー FC (タイ)、傑志 (香港)、ペナン FA (マレーシア)、QAF FC (ブルネイ)、クラブ・バレンシア (モルディブ)、QAF FC (ブルネイ)、DPMM FC (ブルネイ)、QAF FC (ブルネイ)、屯門体育会 (香港)、名門世家加義 (マカオ)、チャーチル・ブラザーズ SC (インド)、ラカブラ・ユナイテッド (ミャンマー)、マナン・マルシャンディ FC (ネパール)、ビルド・ブライト・ユナイテッド (カンボジア)
8	三鷹高等学校、青梅 FC、ボーラムウッド FC (イングランド)、アルビレックス新潟シンガポール、タイ:ロンブリー FC (タイ)、スパンブリー FC (タイ)、青梅 FC、FC ウニス・ボゴスチャ (ボスニア・ヘルツェゴビナ)、FK スロボダ・トウズラ (ボスニア・ヘルツェゴビナ)	30	青森山田高校、FC 東京、ガイナレ鳥取、ブラウブリッツ秋田、パタヤ・ユナイテッド FC (タイ)、FB グルベネ 2005 (ラトビア)
9	奈良育英高等学校、アルビレックス新潟シンガポール、チェンライユナイテッド FC(タイ)、パタヤユナイテッド FC(タイ)	31	東邦高校、地球環境高校、東海学院文化教養専門学校、浜松大学、AC 長野パルセイロ、オーソットサパー・サラブリー FC (タイ)、アーミー・ユナイテッド (タイ)、FB グルベネ 2005(ラトビア)、FK ヴェンツピルス(ラトビア)、FC ザカルパッチャ・ウージュホロド (ウクライナ)
10	光高等学校、中京大学、アルビレックス新潟、アルビレックス新潟シンガポール、ゲイラン・ユナイテッド FC (シンガポール)、パレスティア・カルサ FC (シンガポール)、バンコク・ユニバーシティ(タイ)、モフン・バガン(インド)、サルガオカー SC (インド)、インド: デンポ SC (インド)		

11	松戸八切高校、順天堂大学、栃木 SC、佐川印刷 SC、ギラヴァンツ北九州、オーソットサパー M-150 サラブリー (タイ)	32	滝川第二高等学校、ジェフユナイテッド市原、京都パープルサンガ、ジュビロ磐田、京都サンガ F.C、ジェフユナイテッド市原、BEC テロ・サーサナ FC (タイ)、大分トリニータ
12	桐光学園高等学校、本田技研、ヴァンフォーレ甲府、ロアッソ熊本、バンコク・ユナイテッド FC (タイ)	33	国土舘大学、三菱養和 SC、静岡 FC、アルビレックス新潟シンガポール、RABAC ミトゥラパープ FC (タイ)、アーミー・ユナイテッド FC (タイ)、シーラチャー・SUZUKI FC (タイ)
13	草津東高等学校、京都産業大学、SAGAWA SHIGA FC、スパンプリー FC (タイ)	34	富山第一高校、JAPAN サッカーカレッジ、アルビレックス新潟シンガポール、JAPAN サッカーカレッジ、アルビレックス新潟、パタヤ・ユナイテッド (タイ)、カタール富山
14	作陽高校、吉備国際大学、リバー・フリー・キッカーズ、三菱水島 FC、FC 琉球、横河武蔵野 FC、アントーン FC (タイ)	35	静岡学園高等学校、横浜マリノス、CD テネリフェ (スペイン)、アルビレックス新潟、モントリオール・インパクト (カナダ)、バンコク・ユニバーシティ FC (タイ)、シンガポール・アムド・フォーシズ FC (シンガポール)、バンコク・ユナイテッド FC (タイ)、四海レンジャーズ (香港)、ボンタン FC (インドネシア)
15	徳島ヴォルティスユース、ルネス学園甲賀 SC、SAGAWA SHIGA FC、シーラーチャー SUZUKI FC (タイ)	36	帝京高校、早稲田大学、横浜マリノス、モンテディオ山形、アルビレックス新潟、ベガルタ仙台、AC 長野パルセイロ、チョンブリー FC (タイ)、タイ・ポート FC (タイ) → 「Jリーグ・アジアアンバサダー」
16	滝川第二高校、ガンバ大阪、アビスパ福岡、ヴァリエンテ富山、FC Mi-O びわこ、カスタムズ FC (タイ) → 「Jリーグ・アジアアンバサダー」 「一般社団法人 Japan Dream Football Association (JDFA)」	37	富山第一高等学校、中央大学、エリース FC 東京、アルビレックス新潟シンガポール、ソクラー FC (タイ)
17	鹿本高等学校、福岡大学、ガイナレ鳥取、佐川印刷 SC、チョンブリー FC (タイ)、ウワチャン・ユナイテッド (タイ)	38	伊奈総合学園高校、専修大学、NTT 関東、埼玉サッカークラブ、佐川急便東京 SC、ファジャーノ岡山、ニューウェーブ北九州、ラバチャ FC (タイ) → 日系企業 (タイ)
18	熊本西高等学校、日本文理大学、SC 鳥取、ロアッソ熊本、熊本教員蹴友団、チャイナート FC (タイ)、ラヨン・ユナイテッド (タイ)	39	川崎フロンターレ U-18、水戸ホーリーホック、カマタマーレ讃岐、TTMFC ピチット (タイ)、ロイヤル タイ アーミー FC (タイ) → 引退?
19	浦和学院高等学校、成蹊大学、飯能ブルーダー、アヴェントゥーラ川口、シーラチャー FC (タイ)、コンケン FC (タイ)、チェンマイ FC (タイ)、ソクラー FC (タイ)	40	国土舘高校、国土舘大学、栃木 SC、ニューウェーブ北九州、サムットソクラー FC (タイ)、CS プログレスル・コラビア (ルーマニア)、栃木ウーヴァ FC → 指導者 (日本)
20	ヴェルディ相模原ユース、尚美学園大、東京ベルディ、バスカドーラ町田、スパンプリー FC (タイ)	41	熊本学園大付属高校、福岡教育大学、サガン鳥栖、アルビレックス新潟、大宮アルディージャ、ヴァンフォーレ甲府、チョンブリー FC (タイ)、タイ・ポート FC (タイ)、V・ファーレン長崎 → 指導者 (日本)
21	流通経済大学付属柏高校、流通経済大学、シーラチャー SUZUKI FC (タイ)		
22	福井商業高等学校、北陸大学、サムットブラカーン・ユナイテッド FC (タイ)		

※ 『タイ キュイジース ジャパン』 (タイへの日本人選手を斡旋する会社 (の HP) <http://www.tpljp.net/>) 参照、No.17・No.18 への聞き取り確認及び Wikipedia により作成

社会的な様相に注目することとした。

2) 調査の方法

【調査期間】

調査期間は、以下の現地調査を含む、2012年10月～2013年7月であった。

第1回現地調査：2013年2月11日～14日

第2回現地調査：2013年6月18日～22日

【調査方法】

資料収集及び聞き取り調査を行った。聞き取り調査対象者の概要は以下に示すとおりである。

① K 氏

現在、アルビ S のチェアマン兼社長を務める 35 歳の男性。2002 年に大手携帯サイトに就職、スポーツ情報関連に従事。サッカービジネスに興味があり、2008 年にアルビ S の独立化に伴い、社長に就任した。

家族 (奥さん、子ども 2 人) とともにシンガポールに暮らす。

② O 氏

現在、アルビ S でコーチ¹⁾ (第 3 コーチ的立場) を務める 37 歳の男性。新潟県の高校を卒業後、アルビレックス新潟 (以下、アルビとする) の前身チームにプロ選手として所属。23 歳の時に戦力外となり、北信越リーグに所属する JAPAN サッカーカレッジ (アルビ、アルビ S、新潟医療福祉大学などと同じ経営グループに位置づくサッカー専門学校。以下、カレッジとする) の助っ人選手兼アルビスクールコーチとなった。その後、ジュニアユース、レディースの監督を経て、2013 年から現職。2009 年に結婚し、シンガポールで家族 (妻、子ども 2 人) と暮らす。

③ N 氏

シンガポールで少年サッカースクールを中心とした

サッカービジネスを展開する会社 GFA の代表を務める 36 歳の男性。埼玉県出身で、千葉県の高校を卒業後、東海大学に進学。一般企業に半年勤務した後、S リーグ（シンガポールのプロリーグ）のセレクションを受け合格。日本人で初めて S リーグでプレーした日本人となる。S リーグでは、2001 年～2011 年までプロ契約選手として計 6 チームでプレー。2012 年に現役引退し、2004 年から始めていた少年サッカースクールを本格的に事業化し、2005 年に GFA を立ち上げた。2013 年にデヴィジョン 1（2 部リーグ）のチームである「Eunos」の運営に乗り出し、2014 年度 S リーグ昇格予定。S リーグに所属した 2 年目に、彼女（高校・大学で同級生）がシンガポールで就職し結婚、現在は、妻と子ども 2 人と暮らす。

④ S 選手

S リーグのウォリアーズに所属するプロサッカー選手で 29 歳の男性。大阪府出身で、静岡県の高校から関西大学に進学。卒業後、J2 の FC 岐阜に 2 年、沖縄かりゆし FC に 1 年、カレッジに 1 年、アルビ S に 1 年と渡り歩き、ウォリアーズ FC に入団し 2 年目を迎える。妻の S 婦人と 2 人で暮らす。

⑤ S 婦人

S 選手の妻（27 歳）。静岡県出身で、鹿児島の高校からカレッジに進学。同時に、アルビのレディースに入団し、「なでしこリーグ」等で活躍。2011 年引退し S 選手と結婚、2012 年からシンガポールに移り住み、女子の国内リーグでプレー再開（2012 年度 MVP）、GFA でパートタイムのサッカースクールコーチを務める。

⑥ I 選手

S リーグのウォリアーズに所属するプロサッカー選手で 23 歳の男性（独身）。千葉県出身で、ジェフユナイテッド市原・千葉のジュニアユース、ユースを経て、トップチームとプロ契約。2 年間で戦力外通告を受け、2010 年にアルビ S に入団。2 年間所属した後、活躍（2011 年 S リーグ新人王・ベストイレブン）が認められ、ウォリアーズ FC に移籍、2 年目を迎える。現在、早稲田大学人間科学部 e スクールに J リーグ特別推薦枠で入学し在籍中である。

3. シンガポールの社会状況

シンガポールは第二次世界大戦後、日本の統治下からイギリス領となり、その後 1963 年にマラヤ連邦、ボルネオとともにマレーシア連邦を結成した。その後、マレー系住民と中国系住民の争いを経て、1965 年にマレーシア連邦から分立する形で独立した。位置

的には東南アジアのほぼ中心にある。北側のマレー半島（マレーシア）とはジョホール海峡で隔てられている。中心地となるシンガポール島（東西 42km、南北 23km：東京 23 区程度）と 60 程度の島からなる。人口は 4,737,000 人（2008 年）で世界第 2 位の人口密度である。民族構成は、中国 76.7%、マレー 14.0%、インド 7.9% となっており、公用語として、英語、中国語、マレー語、タミル語が使用されている。農地面積は 700ha で国土全体の 1.4% しかない（日本の農林水産省データ、以下農林水産業のデータの出所は同じ）。そのため、食料供給の大半は輸入に依存している。食料自給率は 1 割未満である（農林水産業の GDP に占める割合は 0.04%、農業人口約 4,000 人）。また、水資源に乏しく、国内の貯水池とマレーシアからの輸入に頼っている。国民の食生活は外食中心で自炊の習慣があまりないといわれ、多数の「ホーカーズ」（大衆向け外食広場）が存在する。

政治的には、「人民行動党」の一党独裁制であり、国家資本主義体制といえる（このことに関して K 氏は「言論は大きく制限されている。野党候補を当選させた選挙区は、公団住宅の改装などが後回しにされる」と語っている）。富裕世帯の割合が世界第一位で、金融資産 100 万ドル（約 8000 万円）以上が 15.5% を占める（2 位のスイスは 9.9%）。2011 年の一人当たりの GDP は世界 12 位となっている（日本 17 位、IMF データによる）。（財）自治体国際化協会（1998）によると、このような急激な経済発展の背景には、政府自らが港湾、道路、工業用地などの産業インフラの整備を集中的に進め、外国企業を誘致し、製品を海外市場に輸出して成長するという「国家主導型開発」があるという。そのため、独立以前の貿易基地の要衝としての機能に加え、独立後は、外資系企業を中心とする製造業中心の構造へと変化した（GDP の 3 割以上が外資系企業や外国人によって産出される）。さらに、1980 年代からは金融・ビジネスサービス業が大きく成長している（GDP 構成比 2003 年：製造業 26.1%、金融・ビジネスサービス 24.7%）。

またシンガポールは、学校教育に大きな力を注いでおり、教育費が歳出の 26% を占めている（約 40% の国防費に次ぐ第 2 位）。教育制度の変遷について、池田（2007）が以下のような報告を行っている。まず、1979 年に導入された、初等教育から始まるストーリーミング（学力による選別制度）が大きな特徴として指摘される。初等教育 4 年終了時という早い段階から選別試験によって生徒を能力別コースに振り分け、能力の高い人材により高度な教育を施す「徹底した能力主義」といえる。徹底したエリート教育を通じて、ビジネス遂行能力の高い人材を効率的に育成してきたこ

の制度は、同国の高度経済成長に大きく寄与してきた。しかし、競争システムの下位に置かれた生徒を個性に応じて多角的に育成したり、学問以外の面で卓越した能力を持つ生徒を特にサポートしたりする視点は決して十分ではなかったという批判もなされてきた。そこで、政府は、2006年9月に、初等学校のストリーミング制度そのものを2008年から廃止し、教科ごとにレベルを分けたクラス編成を導入すると発表した。そして、ストリーミング制度の廃止と同時に中等教育課程において各学校の教育方針の多様化を促す「ニッチ・プログラム・スクール」制度がスタートした。現在、12の中等学校が、スポーツ競技や舞台芸術など学業以外の専門性の高い分野（ニッチ）において特別に優秀な成績を収めている学校として教育省に認定されている。能力主義に基づいた実践的な学問重視の選抜システムを採用し、芸術やスポーツなどに従来あまり力を入れてこなかったシンガポール教育界にとって、大きな方針転換を示すものといえる。

例えば、2004年に先取りして開校した「シンガポール・スポーツ・スクール」（中学校）の概要は以下の通りである。まず、直接の所管は教育省ではなく自治・青年・スポーツ省とされる。スポーツ以外では、2005年開校の数学や自然科学を集中的に学ぶためのNUS（シンガポール国立大学）ハイスクールや2008年開校の芸術分野に秀でた子どものためのスクール・オブ・アーツがある。池田によると、スポーツ・スクールの設置は、国家戦略が色濃く反映されたものであるという。近年の経済成長率の鈍化と失業率の増加という社会状況において、多民族・多宗教国家であるシンガポールの国民が再び一つにまとまるために、政府はスポーツの発展を大きな目標として掲げ、2001年に自治・青年・スポーツ省が「スポーツ振興に関する提言」を発表したと述べている。ここでは、「スポーティング・シンガポール」のスローガンの下、スポーツエリート育成を通じてスポーツ振興と民族間の協調を図ることが謳われ、その一環として総工費約50億円を国費から投じてスポーツ・スクールが設立された。主として陸上、バドミントン、ボウリング、卓球、セーリング、ゴルフ、水泳、サッカー、ネットボールの9種目に限定し、約7haの敷地に最新鋭の各種スポーツ施設が備えられている。生徒は、敷地内に併設されている寄宿舎生活を送り、午前6時30分から朝トレーニング、午前9時から午後2時まで教室棟で授業、午後4時から午後7時まで各競技のトレーニングが行われる。各競技のヘッドコーチは、各競技団体から推薦を受けた一流の指導者を個別に採用しており、そのほとんどが外国人である（例えば、バドミントンはインドネシア人、サッカーはオランダ人、卓球は中国人）。

生徒一人当たりにかかる経費は年間約2万5000\$（約188万円）であるが、親が支払うのは食事代と寄宿舎代の年間6000\$（約45万円）のみであり、差額は基本的に政府が補助している。

4. Sリーグの現状

Sリーグは1996年に開幕し、現在12のクラブが所属している。K氏によると、シンガポールでは国家代表チームの人気は高く、5万人収容のナショナルスタジアムも満員になるが、一般的なサッカー人気はそれほどなく、クラブサポーターも少ないという。Sリーグ入場券は5～6\$（約400円～500円）、1試合平均入場者数は1000人程度となっている。2013年度リーグ戦には、アルビS以外にも、ブルネイやマレーシアのチームが参加している（過去には、フランス、中国、アメリカ、アフリカのチームも参加）。このような多国籍リーグとなっている現状をK氏は「Sリーグにかけているのはナショナリズムだということ、海外のチームが参加したら良いのではないかということ、アルビにも声がかかった」と述べている。しかし、現実には「海外のチームは長くて2年しかいない。お金が回らないから、意味を見いだせないから」というように多くのチームが短期間でSリーグから離脱している。クラブ経営の困難さの原因として、一つは「シンガポールではスポーツにお金を投資する企業を探すのが困難」（K氏）であることが挙げられる。また、物価的にはほぼ日本と同じでありながら、一般的なスポーツ観戦のニーズが乏しく、入場料も日本の4分の1から5分の1程度に抑えられている。それでも入場者数は少なく、固定的なクラブサポーターもほとんど存在しない。クラブサポーターが存在しない理由についてK氏は「所詮、東京23区ぐらいの広さしかない国だから、町内対抗運動会みたいなものでしかない」と述べている。さらに、リーグ戦のTV中継は1週間に1試合程度しかなく、視聴率も低いという。そのため、他国に見られるようなクラブ経営の重要な収入源となる放映権料に関する収入も存在していない。

以上のように、サッカーそのものからの収入が限られている中で、クラブ経営の収入源は、Sリーグからの分配金とミニカジノの収益によって賄われている。Sリーグからの分配金は、シンガポールスポーツカウンシル（政府組織）からの補助金や公営ギャンブルの収益金から出ているということであった。クラブとミニカジノ関係についてK氏は以下のように述べている。

「外国のチームは2年ぐらいで退散していく。国内のチームは経営的にやれているのは、ミニカ

ジノを運営できるから、人によっては3日間で300万円ほど使う人もいる。ただし、売り上げの半分弱は税金で持って行かれる。カジノの運営許可はサッカークラブのように、地域に対して貢献している団体（その他日本人会やアメリカンクラブなど）に下りる。アルビSも最初2台だったのが今は10台になった（国外のチームではアルビSだけが許可を得ている）。カジノに来るお客とサッカー観戦者はまったく関係ない。なんで、サッカーチームの運営をやりたがるかというと、カジノを持ちたいからなんです」

また、Sリーグの競技力は、他の東アジアのリーグに比べ高くないという。その理由として、一つは兵役制度、もう一つはヤングライオンズというチームの存在があるという。シンガポールU23代表チームのことで、23歳以下の能力の高い選手は全部そこに持って行かれてしまうという。そのため、ほとんどのチームは選手育成に力を注がないという。

このようなSリーグの置かれた状況の中では、Sリーガーの「ステイタスはなく、国民からの社会的信頼は高くない」といい、「この国の子どもたちがサッカー選手を目指す理由はあまりないんです。メディアがサッカー選手を取り上げることもない。最高年棒のSリーガーでも600万円程度しかない」と語っている。

5. アルビSの状況

1) 活動状況

現在、選手25名及び指導スタッフ7名は全員日本人で構成されている。2012年度はSリーグで3位、リーグカップでは優勝し、観客動員数では13チーム中2位（1位はブルネイのチーム）となっている。ホームスタジアムは、国の公共スポーツ施設（レジャープールやフィットネススタジアムがある総合スポーツリゾート施設で全国に20か所ある）を使用している。同施設内には、クラブハウス、事務所、カジノも併設している。借用料は、スタジアムが年間約500万円から600万円（年によりより異なる）程度で、クラブハウス等はそれぞれ月額約10万円程度となっている。クラブチームの試合観戦という習慣がほとんどない国であったため、選手による現地小学校への巡回指導（年間約7,000人）やチアリーディングチームの結成などの地域活動を行い、観客動員を図っている（このような取り組みはアルビS以外のチームでは行われていないということであった）。

クラブ経営的には、日本のアルビとは別法人であり、独立採算をとっている。強力な提携クラブという関係

性のもとで、人事交流などが行われている（資本としては入っているが、金銭的な支援はない）。設立当初の目的は、アルビのサテライトあるいは育成チームとしての役割を果たすことであったが、競技レベルの差が激しいため全く機能していなかった。2008年にK氏が社長に就任し、現在のような独自運営へと舵を切ったということであった。その結果、後述するような若手選手の海外移籍の中継クラブとしての役割を担うこととなった。K氏によると、「少ない年で4～5人、多いときで10人ぐらいいはシンガポール以外の国に自分のプレーする場を求めていく。これまで50人以上の選手が海外へ出ていった」ということである。

2) クラブ経営

① 海外移籍

アルビSの活動を紹介するサッカー番組『FOOT BRAIN』（テレビ東京制作：2012年4月28日放送）では、以下のようなナレーションが盛んに使われている。

「ヨーロッパだけが海外でない。アルビSの存在は新しい海外移籍のチャンスを作り出していた」「毎年のように出てくる、行き場を失った選手たち、K氏はJリーグトライアウトに毎年出向き、彼らにシンガポールの選択肢を伝えてきた」「シンガポールで凄く良い環境でサッカーができる。挑戦してみたい（選手コメント）」「アジア移籍を躊躇する選手が多いが、この素晴らしいサッカー環境は彼らが決断する追い風となっている」

「うちのクラブは決してゴールではない。このことは選手に常々言っている。ここで1年ないしは2年過ごして、日本のサッカーと海外のサッカーはすごく違いがあって、それを肌で感じてその経験を活かしてよそへ行く」

「50人以上が他の海外（デンマーク、ブルガリア、スロベニア、南アフリカ、インド、タイ、インドネシア、日本）へと移籍していった」

「『日本サッカーのハブ空港』を目指す」

また、同番組内ではアルビSの現地スポンサーとなっている会社の代表の「昨今の日本の若者は海外に出たがらない。日本に安住している傾向があるということがいろんなところで聞かれる。そこで敢えて、シンガポールに来て厳しい戦いに挑んでいるということは、日本の若者あるいは日本の国にとっても非常に良いことだと感じたのでサポートしている」というコメントが紹介されている。

このような若者の海外移籍の中継クラブとしての役割を担うこととなった経緯について、K氏は次のように述べている。

「そもそもアルビSがシンガポールにいる意味はないじゃないですか。だから、理由を作らなければならないんじゃないんですよ。こちらで活躍した選手を日本に連れて帰っても、『とてもじゃないけど、こんな選手使えないよ』という話になって』と行き場所がなくなっていった。徐々に日本のアルビとは距離が離れていき、今のような独立した形になった」

そして、アルビSのサッカークラブとしての位置づけを、以下のように東アジアにおける日本人選手の「ショーケース」と評価している。

「世界で戦うプロサッカー選手を育てるということで、Jリーガーにはなれない、あるいは、Jリーグをやめてしまった若い選手たちを集めて、ここはいろんな国が近いので、タイとかマレーシアとかインドネシアとか、いわゆる『ショーケース』なんです。いいプレーすればアジア中に報道されるので、他のリーグへ引き抜かれていく可能性も高い」

K氏はこのような状況について「行って、もっと海外のことを経験してきなさいと、そして最終的には日本の国で活躍できる人になってほしい。というような流れでやっている」と理想論を語りつつも、同時に「同じ選手のコストを複数年もうちでは賄いきれないですよ。基本的には全員単年契約しかしない」と若い選手を1年ないし2年でチームから切り離していくクラブの経営事情を語っている。

K氏は、今後もこのような日本人選手の東南アジア進出が続くとみており、「彼らが種まきをしてきている。プレーの面でもそうだが、振る舞いや態度なども、日本人はいい選手だという評判になって、今では、ダイレクトでそこへ行けるようになった」と送り出した選手たちが後に続く選手たちの道標になっていると捉えている。さらに、「実際に夢をつかんで、うちを卒業して一番儲けている選手は、ヨーロッパに行った選手もいるけど、一番はインドネシアに行った選手。家、車、食事、税金を全部クラブが持ち、手取りで2000万円ぐらい。すべて換算すると6000万から8000万円ぐらいに相当する。Jリーグでいえば日本代表クラスですよ。だけどその選手はJリーグなどにも行ったこともない選手です。たまたまアジアの水があったのかわからないけど、そういうアジアンドリームが現実起こっているんですね」と誇らしげに語っている。

② 経営の多角化

アルビSのクラブ運営における2つ目の特徴はミニカジノの運営などの経営の多角化にある。K氏が

2008年に社長に就任してすぐに着手したのがミニカジノの許可を得ることであった。3年の月日を費やし許可を得ることができたという。現在は、再投資してスロットマシンを増設し、数千万円単位での増収を見込んでいるという。

サッカーそのものから収入を得ることが難しい状況について、K氏は以下のように語っている。

「Sリーグのチームはカジノがないとやっていけない。その上、アルビSは、Sリーグからの分配金が他のチームよりも少ない。海外のチームだからと言って5～6千万円少ない。これだけ不平等なリーグなのに、まだ我々が強いというのはどういうことだと、他のチームは何をやっているんだろうと思う」

このような厳しい運営状況に抵抗するためその他にも様々な手段を用いている。例えば、「ホーカーズ」における日本食レストランの経営である。ここは、アルビSの広告的意味合いだけでなく、選手たちに朝夕2食を提供し経費節減の役割を担っている（アルビSは、選手の年俸を非常に低く設定する一方で、住居や食事などの環境面におけるサポートの充実をセールスポイントとしている）。また、関連法人であるカレッジからインターンシップとして選手を所属させている（国からの補助金にはその選手の給料も含まれるが、インターンシップの選手には給料は支払われない）。毎年、4割から5割程度がカレッジからのインターンシップの選手で構成されるということであった。このことに関して、K氏は「うちは、給料は出しません。そういうことしないと回らないですから。ただ、インターンシップという形からうちの契約をつかんでいく選手もいます。そして、シンガポールの別チームに引き抜かれていった選手もいますから」とその正当性を主張している。さらに、2012年にはスペインのバルセロナカタルーニャ4部リーグに「アルビレックス新潟バルセロナ」をチーム登録し、サッカー留学生ビジネスに乗り出している。

③ アルビSの選手たち

K氏によると、アルビSの選手の年俸は、日本サッカーリーグ（JFL）選手の平均よりも少し高いぐらいということであった。全選手同額で単年契約となっており、その理由を「うちは継続する場所ではない。1年ないし2年のチャンスを与えるという立場」と述べている。

また、日本のJ1やJ2の選手のように、ホームタウンのローカル新聞やテレビで取り扱われることもほとんどない。選手たちは、シーズンの一カ月半ほど前に入国し（1月上旬）、プレシーズンのトレーニングを

行う。練習会場となるホームスタジアムと住居するマンションが近いこともあり、練習時間以外はマンションや近隣地区で過ごすことが多い。

O氏によると、チームの選手構成は、Jリーグである程度キャリアのある選手（1～2名）、前チームから戦力外通告を受けたあるいは学卒後に所属チームがなくこれからステップアップを目指す選手（数名）、カレッジのインターンシップ選手（10名以上）となっているという。ステップアップを目指す選手やインターンシップ選手には、将来のビジョンを持つように常に指導しているが、プレーや日常生活においてそのような意識の見えない選手もいるという。そのような選手のことをO氏は「どんな理由でこちらに来ることになったかを理解していない子も多い。自分の置かれている状況をつかんでいない子もいる」と語り、「ここにいる選手は、今できているから良いという気持ちが強いのかなと思う。後のこと（引退後：筆者）は、その時考えれば良いという感じにいる」と将来のことを危惧していた。

一方、元アルビSでプレーし、その後ローカルチームに移籍を果たした後、現地でサッカービジネスを展開するN氏は、その内情について次のように語っていた。

「カレッジの子は、専門学校の授業料のほかに、こっちでの家賃・食事代など払って給料は全くない。自分の場合、額面上はJFLぐらいだったが、家代で1000ドル（約8万円）ぐらい引かれて、あと食事代もとられると、残り100ドル（8千円）ぐらいしかなかった。あとは勝てば勝利給があるぐらい。本当にギリギリの生活をしていた。ただ、食べて、寝て、サッカーすることは最低限できる」

同様に元アルビSの選手で、現在はローカルチームに助っ人選手としてプレーすることに成功したS選手も次のように語っている。

「アルビSの給料はほんと安いですから。でもそこからヨーロッパへの道もあるし、ローカルのチームへの移籍もあるから本当にハブ空港ですね。完全に修行の場ですね。どこかで誰かが見ているかと思って。チャレンジの場なのでこれからもそういう選手は多く来ると思います」と語っている。

6. シンガポールサッカーと日本人

1) シンガポールに来るまでの経緯

まずは、S選手、I選手、O氏、N氏のそれぞれがシンガポールに来るまでの経緯について確認しておこ

う。

S選手は、静岡県の高校へサッカー留学し、サッカー推薦で関西大学へ進学した。大学卒業時には、同級生が一流企業へ就職する中で、これまで続けてきたサッカーを仕事とすることを選択し、J2に所属するFC岐阜に入団した。その後、JFLの下のカテゴリーである地域リーグを渡り歩き、北信越リーグのカレッジに入団したことがきっかけとなり、翌年にはシンガポールのアルビSに移籍した。

I選手は、当時J1だったジェフユナイテッドの下部組織で活躍し（年代別日本代表選出）、高校卒業時にトップチームと契約した。しかし、出場機会はほとんどないままに、2年で戦力外通告となった。JFLや地域リーグからのオファーもあったが、後述するように、プロとしてサッカーを続けたいという強い希望があり、アルビSに入団した。ユースからトップチームへ昇格する際に、父親（サラリーマン）は積極的に賛成してくれたが、母親（教員）は大学進学を勧めていたという。

O氏は、高校卒業時にアルビの母体となるチーム（新潟イレブン）が立ち上げられ、その中心人物に自らオファーし入団した。当時を振り返り、「選手を集めている時期でもあり、タイミング的にはスーとはいれた」と語っている。新潟イレブンとしてJFLにいるときは、練習環境、生活環境共に恵まれていた。しかし、5年目でチームがJ2に昇格することとなり、同時に選手が大量解雇された。その中の一人となりショックを受けたが、仕方がないという気持ちもあったという。ただ、サッカーから離れたくないというのが大前提としてあったため、プロのコーチ業に就くこととなった。その時の気持ちを「サッカーに携わった中でご飯が食べていけたらというのが大前提としてあった。サッカーのお世話になったという気持ちが強かった」と語っている。通常、プロコーチはフリーランスとして単年契約のもとチームを渡り歩くことが多いが、O氏の場合、アルビの立ち上げ時からの選手でもあり、また地元出身ということもあって社员的な立場にあるという。シンガポールにきた経緯についても、「ちょっと社員扱いというか、そういう扱いもされつつ、まあこっちにも行ってみるということもあって」と語っている。

N氏の場合は、大学卒業後、東京都内で一般企業（営業職）に就職していたが、たまたま仕事の休みの日に、Sリーグのチームのセレクションが日本であり、とりあえず受けてみたら合格したという。すぐに、会社に辞表を出してシンガポールにくる手続きを取った。会社側は「夢」を追いかけるのであればということで快く送り出してくれたという。大学時代は、神奈川県リー

グでプレーし大きな実績を上げることができなかったため、サッカーを続けることを断念し一般企業に就職したという。しかし、サッカー関係の知り合いなどの話を聞き、もう一度サッカーをしたいという気持ちになった時に、偶然、Sリーグのセレクションがあったという。Sリーグで2年目を終えたときに、シンガポールでの就職先を見つけた彼女と結婚した。妻は、高校・大学の同級生で、もともと海外で働くことを希望していたという。現在もシンガポール国内で仕事をしている（最初とは異なる職場）。N氏は、2～3年プレーして帰るつもりだったが、ローカルチームに助っ人選手として移籍することができたことや妻がシンガポールで就職したこと、サッカースクールの子どもたちが増えてきたこともあり、次第に日本に帰る気持ちはなくなったという。

2) プロ選手としてプレーすること

次に、彼らがプロ選手としてプレーすることをどのように捉えているのかということについてみていこう。

S、I選手とも日本国内のチームから戦力外通告を受けながらも、プロ選手としてのステップアップを狙ってプレーを続けている。彼らにとってのステップアップは、「基本的に誰でもステップアップすることを考えているが、目指すところは人それぞれ。収入のステップアップなのか、サッカー環境のステップアップなのか、と個人差ある」と大きくは2通り分かれるという。つまり「ヨーロッパを頂点とするピラミッドの中で皆が同じようなステップアップを狙って東南アジアでプレーしているわけではない。そこでどこを目指すかわってくる。ヨーロッパを目指していく人はそういうサッカーのレベルアップを目指していくし、アジアのインドネシアに行く人は金銭的なステップアップを目指している」²⁾のである。

そして彼らは、以下のように「サッカーで飯を食う」ということを強調する。

「J2以下だと条件に左右されるでしょうね。シンガポールから見ても、J2だと絶対給料は下がる。日本にいたら最低限の給料しかもらえない。それは本当に最低限で、家族を養えるとかのレベルではない。サッカーで飯を食うという意味では、東南アジアはうってつけの場だと思う」

S選手が、J2やJFLの選手時代を振り返り、「まわりの選手の多くは、親に養ってもらうか、比較的給料をもらっている先輩についていか。そんな感じだった」と述べるのを聞き、I選手は「それは嫌だなあ。それはやっぱりプロと呼べないから。生活できていないから。ジェフを首になった時はそういうチームはいくらでもあったんですよ。でも、生活できるほどの給

料もらうチームはなかった。それだと趣味じゃないですか。独身だと最低20万円ないとだめですね。既婚者で30万、20万円もらえるのはJ2にもあまりない。他力本願（親や先輩を頼ること：筆者）でもサッカーできる環境にあればそれでもいいとは思う。だけど、生きている価値を見いだせないと思う」と語っている。

また、彼にとってプロ選手であるということは「100%サッカーに専念する」ということでもある。このことは、I選手のアマチュア選手に関する以下のエピソードから強く伺える。

「自分がジェフのトップにいたとき、若手はJFLの練習に行って来いと言われるんですよ。アマチュアの選手と一緒に練習させられるんですよ。みんな夜まで仕事してそこから練習やって、それをみてこれは無理だと思いました。その上、みんなサッカーではお金もらっていないんですよ。そりゃ無理だと思いました。それで33歳とか35歳の人たちがチームにごろごろいるんですよ。それは僕は無理ですね。そうやって、働きながらサッカー続けている人たちは尊敬はするんですけど、でも自分には出来ない。サッカーの練習に疲れ切った顔で来るんですよ。夜、8時から10時まで練習するんですよ。そして次の日また朝から仕事に行くんですよ。これは無理だなあと思って。探せば、サッカーをする場所は絶対あるんですよ。世界には。だからどっちを選ぶかなんですよ。俺はサッカーは絶対プロでやりたいんですよ。ずーと。仕事しながらやりたくないんですよ。だったらやめたほうが良いんですよ。仕事しながらだとかではサッカーに100%力を入れられないでしょ。でも世界のどこかには（プロとして：筆者）サッカーやれる場所があるんですよ」

このことに関してS選手も「仕事しながらサッカーやっている人は100%の力でサッカーやっていないですよ」と同調していた。

さらに、彼らはプロ選手として置かれている今の状況を決して悲観的に捉えていない。2人とも今シーズンで現チームとの契約が切れ、来シーズンのことは全く不明であるが、以下のように前向きにとらえている。

「2年でシンガポールを出ようと思っていただけ。今年5年目を迎えて、シンガポールは楽しいなと思えるようになったので。そしたら、アジアの他の国にも行ってみたいと思うようになって。日本いるときよりサッカーにやりがいがある。外国人として期待されているので。お前がやってくれみたいに見られているし、日本ではそういうことは言われられないので。シビアに切られるこ

ともありますが、外国人なのでそれに対してはシビアですよ」

「タイからのオファーだとすぐに行きます。タイはサッカー熱も価値も高い。そういういろんなチャンスがあれば行きたい。インドあたりの半年契約も視野に入れてます。半期ぐらいの契約が一番良いですね。チームも焦っているんで、早く契約してくれる。自分にとっても、半年ですぐに切れるので合わなかったときに次のチームに移りやすい」

プロ選手としての彼らの暮らしは決して安定したものではない。将来性も確かではない。しかし彼らはそのようなプロ選手としての暮らし自体に充実感を感じそこに居続けようとしているのである。

しかし一方では、S選手やI選手と同様に、若いときにプロ契約を打ち切れ、コーチ業に転身したO氏は、ステップアップを目指していく若い選手たちに、早い段階で別の道に進むことや引退後のことについて積極的にアドバイスを送るという。彼は、「22～3歳のちょうど首を切られる頃に、他球団への移籍や様々な人間関係に悩まされるうちに、いろんな本を読んだりして考えるようになった。苦しんだ時期に、本を読んだり、親やいろんな人に話を聞いたりした結果、「一人では生きていけないということを自分は常に伝えていきたい」と思うようになったと言う。また、GFAで出会った若いスタッフのK君も「最初はプロになるのが夢だったけど、こうやってスクールとかやっていると今は会社を優先したいなあと思う。アルビSやローカルチームのプロ選手を見ていると時間があっていなあとは思いますが、“プロボケ”してしまうなと感じる。夕方の5時半から8時まで練習やって、次の日の5時半間まで何もないじゃないですか。そういう生活に最初あこがれはあったけど、大学卒業して社会人としての生活をちょっとしただけだけど、もしそんな生活していたら、サッカー辞めた後だめだろうと思った。だから、今のこの仕事（スクールと幼稚園）を継続しながらサッカーができる環境があればいいかなと思っています」と語っている。プロ選手としてサッカーの場に留まり続けようとするS選手やI選手とは対照的である。しかし、彼のコメントも、プロ選手であることが、「サッカーで飯を食い」「100%サッカーに専念する」ということを裏付けているのである。

3) シンガポールでプレーすること、暮らすこと

それでは次に、彼らがシンガポールサッカーに勤しみ、暮らしていくことについて検討してみたい。その際、地域的な事情を考慮しなければならないであろう。その一つは、アルビSの存在である。シンガポール

に渡る日本人サッカー選手のほとんどはアルビSを経由している。そこでの暮らしは、住まいと食事が提供され2万円程度の給料を受け取るという条件にあるため、非常に限られた範囲のものでしかない。S選手は「アルビSでは外に出ることはできない。手取りの2万じゃ何もできない。外に出ないとあの小さなコミュニティの中から抜け出せない」と語っている。そして、その小さなコミュニティから抜け出すには、もちろんサッカーで実績を上げることが重要となるのであり、前述したように100%サッカーに打ち込む暮らしを送ることができるかということである。S選手が「ローカルチームに移籍すると本当にいろんな人と出会えるようになる。一気に暮らしが変わります。そこで視野も広がります」というように、そこで彼らの暮らしは大きく変化するのである。しかし、ここで留意すべきは、海外資本を積極的に移入し、急激な経済発展を遂げてきたシンガポールには、日本企業も多く進出しているということである。在シンガポール日本人が2万人以上居住しており、日本人コミュニティが存在しているのである。彼らはまずのその安定した関係性の中でプレーし、暮らすことができるのである。加えて、彼らは皆フェイスブック等のSNSを活用しており、日本人選手同士の「友だち」の間では、シンガポールのみならず東南アジア各国の暮らしぶりやサッカー情報が共有されていくのである。このことに関して、S選手は以下のように語っている。

「フェイスブックを活用して東南アジアを中心とした移籍関係などのサッカー情報を集めている。『友だち』を通して、国のリーグの情報がすぐ手に入る。中には、ヨーロッパに移籍する選手もいるのでそちらの情報も入る。まずは、アルビSに入ると、そのコミュニティに入ることができる。そして、徐々に大きなコミュニティ入っていくことが大事」

このことは、現地でサッカービジネスを展開するN氏の事業展開からも見て取れる。

N氏は、現地の日本人学校の子どもたちを対象に、プロ選手の傍らで少年サッカースクール展開していた。徐々に会員が増え、現在は、キッズ・ジュニア・ジュニアユース・ユースまでカテゴリーが開設されている。2005年に会社を設立³⁾し、多角的なサッカービジネスに取り組んでいる。サッカーで海外移籍を果たし、そのまま現地で事業家として成功している例といえるであろう。彼が経営するGFAの活動は、「少年サッカーチーム指導・運営」を中心に、「フットサル教室」「大会運営・企画」「アパレル」「CSR活動」「Sリーグトライアウトアレンジ」「カンボジアGFAの運営」など多方面にわたる。最近では、Sリーグのトライアウ

トのコーディネートの仕事も多くなり、これまで100人ぐらい斡旋したという。サッカースクール会員は約350人で、フットサルやレディースなどを入れると600人ほどになる。また、2013年からは幼稚園経営やカンボジアにおけるCSR活動も盛んに行っており、TOYOTAやYAMAHAをスポンサーとして活動を広げているということであった。

このようにシンガポールにおいて一見拡大しつつあるように思われるN氏のサッカービジネスであるが、その多くが日本人コミュニティを対象としている。GFAのスタッフは全員日本人で、HPも日本語のみで作成されている。現在も少年サッカースクールの会員はほとんどが日本人であり、チームのスポンサー会社の多くは、スクールに通う日本人の保護者に関係する会社である。彼自身も「シンガポールでの仕事の関係は、7割ぐらひは日本人との関係の中で行っている」と述べており、彼にとって非常に安定した関係性の中でサッカービジネスが展開されているのである。

このように、シンガポールの日本人サッカー選手は、アルビSさらには日本人コミュニティという安定した関係性のもと、サッカーに没頭できる環境の中で、徐々に海外を体験していくのである。そして、彼らは海外でプレーすることの最大のメリットを次のように語る。

「最大のメリットはサッカーを通して、いろいろな人に会えること。サッカー人生の中で本当にトップに行かない限りは、蓄えることのできるお金は限られている。サッカー関係だけでなく、例えば商社の人でも『君ならうちでも働いてもらいたいとか』声をかけてもらえるんですよ。たぶん引退してもここで培ったものを活かせばやっていけるという勇気をいろんな人がくれるんで、そこまでは今やれることを100%やるということしか考えていないんですよ。一寸先は闇という意味では、日本にいたときの状況と基本的に変わっていないけど」

彼らは、シンガポールにおいて、プロ選手として報酬を受けるということに加え、暮らしにおける新たな関係性を少しずつ紡いでいるのである。そして、そのような関係性を紡いでいく過程の中で、彼らは徐々にプロサッカー選手として生き抜く気概のようなものを身に付けていくものと考えられる。I選手は「日本にいたときはどうしようか、先が真っ暗だとか、この給料じゃできないとか、そんなことばかり考えていました。日本いたら首切られてそれで終わりだけど、こういう世界を知るとどこかでサッカーはできることに気づく」と語り、S選手も「いろんな国の情報も蓄えていますので、いきなりタイのチームに乗り込んでセレ

クションを受けに行きます。こっちからアジアのいろんなチームにオファーします。日本にいたらそんなこと絶対しない。営業マン魂みたいなものをこっちで養えたと思っている。自分で売り込めばいい」と自身の変化について語っていた。そして、プロ選手の道を断念していく者たちについて「こっちに来ててもそういうスイッチが入らない奴はだめですね。2通りに分かりますね。日本に帰りたいというやつもいます。帰ってどうするのと思いますよね。中途半端に。カンボジアでもどこでもサッカーはできると思います」と語るのである。

7. グローバルなサッカービジネスの歯車として

さて、ここまでそれぞれの選手・コーチの立場から、彼らがシンガポールでサッカーに関わり続ける様相を記述してきた。最後に、彼らがサッカーと関わりながら移動を繰り返す構造について検討しまとめたい。ここでは特に、アルビと関係の深い組織間の関係性に着目して、グローバルなサッカービジネスという視点から見ていくこととする。

本来、多くのJリーグチームはユース-サテライト-トップという単線的な構造を成している。ところが、アルビの場合その両脇に海外移籍の窓口となるアルビSや教育機関としてのカレッジ、高体連チーム、大学までも併せ持つ。これにより、ネットワークの外側からのみ選手が供給されるのではなく、ネットワーク内で選手が移動することが可能となったのである。そこには競技能力の上昇的（下降的）回路のみではなく、水平的移動あるいは地域的移動の回路が用意されており、ネットワークの外側から流入してきた選手が、長くそこに留まりながら選手生活を送る仕組みとなっているのである。このような仕組みが新潟において形成されるに至った経緯について、O氏は、以下のように述べている。

「多くの指導者が、新潟からプロの選手をとという夢で一致している。それから、(アルビの)会長の考えとして、新潟の子を外に出したくないという考えがある。そういう大きな考えのなかで動いている。W杯にあわせて、ビッグスワンという大きな器をつくって、それもW杯終了後はアルビが使用するということで、全体が大きな流れとして動いていた。アルビを中心となって立ち上げた人たちがそういう流れを作った」

しかし、一方でO氏は「カレッジの存在は新潟の子どもたちにとってあまり意味はない。実際、新潟出身の子どもは少なかった。どちらかという、大学で

勉強はしたくないけどサッカーはしたいという子どものための学校」とも指摘している。また監督を務めたアルビレディーズでは、球団が入団時に仕事を斡旋するが、プレイヤーとしての契約が切れた選手がそのまま新潟に残ることはないという。そしてその生活は「チームが職場を斡旋してくれたが、ギリギリの生活で、食えるか食えないかというような暮らし」(S 婦人)であったという。

現時点で、このようなサッカービジネスを核とするアルビネットワークがどのように形成され、新潟にとってどのような影響をもたらしたかということを確認に指摘することはできない。しかし、今回の事例とした選手やコーチがこのようなサッカービジネスの場を移動し続けていることは確かである。それは、S 選手やI 選手が語るように、自らが切り開いてきた道筋というだけでなく、彼らがこのようなサッカービジネスの一つの歯車となっていることも示しているのである。

参考文献

- 海老原 修・横山文人・宮下充正 (1989) スポーツ的社会化における相互的影響の検証. 横浜国立大学人文紀要 第一類 哲学・社会科学, 35: 99-110.
- 池田一智 (2007) シンガポールにおける教育制度の展開～シンガポール・スポーツ・スクールの事例を

中心に～. 自治体国際化フォーラム (財)自治体国際化協会.

Kenyon, G.S. and McPherson, B.D. (1973) Becoming involved in physical activity and sport: A process of socialization. In: Rarick, G.L. (Ed.) Physical activity: Human growth and development. Academic Press: New York, pp.304-332.

高橋潔 (2010) Jリーガーがピッチを去るということ. Jリーグの行動科学, 白桃書房: 175-199.

(財)自治体国際化協会 (1998) シンガポールの産業政策 CLAIR REPORT NUMER 165.

注

- 1) 本人によると、毎年単年契約を結ぶプロコーチであるが、アルビ立ち上げのときからの選手でもあることから、社員の立場として扱われているとのことであった。そのためアルビSでの給料は日本のアルビから出ている。
- 2) S 選手が言うには「ブルガリアはサッカーのレベルだったらやはり高いですよ、でも、1部リーグでも30-40万円の給料ですから、インドネシアで出ている人は月200万円ぐらいもらっています」ということである。
- 3) 2005年の立ち上げ時から、N氏が中心となり会社の運営を行ってきたが、労働ビザの関係上、2011年に選手を引退するまで、会社からの給料は受け取っていない。2012年から会社の代表として給料を受け取るようになった。